

20141220_農業情報総合研究所／農業ビジネス研究会_議事録

久松達央さん新刊「小さくて強い農業をつくる」出版記念トーク・イベント&プチ・パーティ

日時：2014年12月20日（土）19:00－21:00

場所：東京・池袋 「パークオーレ」

発表者：久松達央さん（株式会社久松農園 代表取締役）

参加者：24人（発表者を含まない）

（NPO 法人理事長、会社経営、会社員、デザイナー、経済団体職員、大学教員、シンクタンク研究員、新聞記者、大学生、行政書士、司法書士など）

1. 久松農園について

茨城県土浦市で露地野菜を栽培しています。年間50種類、面積4ヘクタールを、現在7人で回しています。たいがいの野菜は周年で流通しています。このため、遠隔地から野菜が届くこととなります。これは、流通の都合に過ぎません。久松農園では「旬」、「鮮度」、「品質」にこだわっています。植物の自然のカタチに沿った栽培方法です。誰でもできますし、簡単です。この方法は公開しています。しかし、普通の農家はめんどくさくなります。ある農家は「そういうやり方で栽培した野菜を食べたら美味しいよね。でも、うちではやらない」と言っていました。

「畑から玄関までが農業」です。また、「畑をまるごと食べてもらう」を久松農園のコンセプトにしています。ですので、お客様を選ぶこととなります。ある意味、「わがまま」です。これが大事なことです。とはいえ現在の久松農園は、戦略的にこうなったわけではありません。結果としてこうなっただけです。しかし、妥協はしてきませんでした。

2. 農業への新規参入

農業をはじめるとは難しいです。その中でも新規参入（非農家が農地を取得して、農業をはじめるとは）はとても難しいです。戦後の農地解放により、小作農が自作農となりました。農家は世襲がほとんどです。農家の世襲であれば、農業をはじめるとは容易です（たとえば、サラリーマンや公務員が農家を世襲するなど）。また、農地に対する相続税も猶予されます。これでは、人の入れ替わりがありません。入れ替わりがないということは競争も起きません。

新規参入に対する行政の支援は拡充してきています。しかし、お金を出すだけでは不十分です。新規参入の残存率が低いこともその証です。新規参入は起業です。起業とはなんなのかに立ち戻るべきです。お金を出しても、出来ない人はできません。

3. 小さくて強い農業

小さくて強いといっても場当たりのです。しかし、後になって振り返れば、「一本の線になっていた」といえます。

成功している人には共通点があります。自身の専門分野以外の友人が多いことです。そして、「情念」です。私も「農業には向いてないが、農業は好き」です。農業をやりたくてやっています。なので、へこたれません。別の言い方をすると、「バカ」です。バカがロジックの鎧を身につけています。さらに、やめなかった人が結果として成功します。いくら優秀でもやめたら成功しません。

とはいえ、「久松農園は成功していますね」と言われると疑問を感じます。ただし、サバイバーではあることは確かです。やめなければ獲得することができます。続けて行くことが大事。まずはつぶさないことです。

久松農園は小さくて強いが特徴になっています。わがままだからできます。そして、とんがっています。これを求めているお客様に提供しています。なので、久松農園はハイコンテキストです。

何をやったら勝てるかは難しいですが、何をやったら負けるかはわかります。価格競争をしないことです。経営を継続できませんし、価格しか見ないお客はいりません。それよりも、お客様との関係性を作ることが大事です。そこから、価格を上げること考え続けています。コスト高にもお客様に付き合ってもらいます。

久松農園の野菜はメッセージと一緒にないと買っていただけません。ブラインドで他の農園との野菜の食べ比べをしたら、そんなに美味しくないかもしれません。糖度など味だけでなく、お客様を喜ばすことを考えています。久松が作った野菜だから、お客様はかまえて、大事に食べようとしてくれます。

ネットの普及により、情報、決済など小さい農業のためのインフラが整いました。「変態」の時代が訪れています。農業ロボットがマスコミに取り上げられますが、農業経営の管理システムこそが必要です。農業ロボットはマス生産・マス消費に向くかもしれませんが、店内に並べて比較されるだけのものにしかありません。後者はニッチを狙う農家にマッチします。

4. 最後に

新規参入を阻んでいるものは、農地法です。もっととんがった、もっと変わった人が農業に入ってくるべきです。久松農園は全員素人です。現在、農場長を務める伏見さんは食のビジネスにずっとかかわってきましたが、ほかの農園ならば選ばない人材です。しかし、来年は野菜栽培に関する予算権限の委譲も行う予定です。農場長に育ったというよりは、適材を見つけたということです。

久松農園の肝はスタッフ・ミーティング。これによりバラバラで活動できます。ドレイファス・モデルのように達人ではなく、上級者が初心者野菜栽培のノウハウを教える仕組みができています。

来年（2015年）のチャレンジは外部人材の育成です。三条市からの委託にて、自立型の農業者をOJTで育てます。

以上